

鹿大の
KAGOSHIMA
UNIVERSITY チカラ

教育学部

リハビリ介助

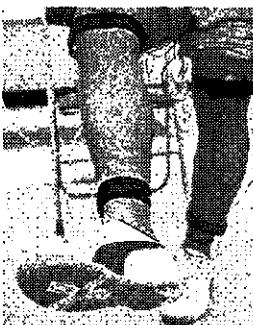
末吉 靖宏 准教授(50)

た与 るで動も だえはえか担た

能力なども回復しないまま
じきた。



機械の刺激で「自主トレ」



足のあちこちについたセンサーで動きを計測する＝鹿児島市の鹿児島大郡元キャンパス

患者自身の「動かしたい」という意志と呼吸が合つてない、神経に働きかけることができる。まだ、技法を習得した人間の間合いには及ばない面も多々ある。「手取り足取りとばよくなつたのです」

いわけではなく、効果的なタ
イミングで与える必要がある。専門医や療法士の技に迫るう
と、靴の裏につけたセンサー
で、足が浮いたり着地したりす
るタイミングをつかんでは、王
一ターを振動させて刺激を与え

与えられるようになれば、介助者がついていなくてもりハビリ施設内や自宅で好きなだけ訓練ができるようになります」と力を込める。

大学院修了後、スポーツ用品メーカーでウォーキングシューズの開発に携わっていたことがあります。」「脳や神経のことを知れば、人間の運動の基本の部分が見えてくる。3年以内に、モーターの小型化と、刺激のタイミングの改良を済ませます」

パンコツで解析するのは、足の上がりだけではない。太もものやすねにもセンサーをつけ、足を振り出す強さも測って刺激との関係を調べる。改善していく様子が数字で表せれば、患者の励みになるとの思いも込められてくる。

音楽や信号などで、患者の側にも機械にタイミングを合わせるよう促せるのでは? そんな質問を「それでは、患者さんの心に負担をかけることになりま
すから」と穏やかな笑顔で切って捨てた。機械といっても、その開発はあくまで人間本位で進
められてくる。